

エンカウンター (ENCOUNTER)

第217号

2020年5月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

佐生健光『キリスト教と称名』より (2)

マタイ伝7・21について

わたしにむかって、「主よ、主よ」と言う者が、みな天国に入るのではなく、ただ、天にいますわが父のみ旨を行なう者だけが、はいるのである。(マタイ伝7・21)

この言葉は、一見ロマ書10・13と矛盾するように思える。ロマ書では、「主の御名を呼び求める者は、すべて救われる」とあるが、マタイ伝では、「すべて」ではないところが問題となる。「天にいますわが父のみ旨を行なう者」に限られるのである。それでは、「わが父のみ旨」とはどんな「み旨」なのだろうか。それは、次のみ言葉に明らかである。

わたしの父のみこころは、子を見て信じる者が、ことごとく永遠の命を得ることなのである。そして、わたしはその人々を終りの日によみがえらせるであろう。(ヨハネ伝6・40)

「天にいますわが父のみ旨」とは、私たちが永遠の命を得ることである。

そのために「主よ、主よ」という者は、終わりの日に一人残らずよみがえらせられるのである。従って、ほかの目的のために、主よ、主よという者は対象外ということになる。地上の目的のために、何かご利益のためは勿論、家族や国家そして世界の平和のために称名することも「永遠の命を得る」てだてにはならないということである。

このように解することができるなら、マタイ伝とロマ書には何の矛盾もない。我々は、はばかりず、永遠の命を得るために主の御名を称えることにしよう。

再び罪を犯すキリスト者について

日常の自分を省みて、「自分はこれでよいのだろうか」と、しばしば考えることがある。私たちが日々の生活続ける過程で、キリスト者であっても犯す罪の問題をどう考えたらよいか。これは悩ましき重要事である。このことについて、先に述べたロマ書 3・24 を今一度とり上げてみたい。

口語訳聖書では「キリスト・イエスによる贖いによって義とされるのである」とある所を、小西先生は「キリスト・イエスによる贖いによって義とせられつつあるからである」と訳された。特に、内村先生もこのように訳されたこと、「常に義とせられつつ」という言葉に注目された。……その後、内村先生の『ロマ書の研究』を読み、理解を重ねることができた。以下、その一部を転記させていただく。

我らは悔い改めて神に帰するに至った後といえども、決して全ったき清浄無罪に達するものではない。波瀾重畳は実に信仰生活の常の姿である。比較的清きこともあるが、罪に落ちいりて悲しむこともまた度々である。一たび誘いに勝ちて喜びにあふるも、ただちにまたこれに負けて、深き悲嘆と重き憂愁に襲われる。

そのために自己を偽善者と見て大いに失望し、その極、ついに

信仰を捨つる者も少なくない。ある人は、悔い改めし後の生涯において人は決して罪を犯さないという。しかし、不幸にして、これ、われらの実際の経験と相反している。人は信仰に入りても常に罪を犯しつつあるのである。

ゆえに「常に義とせられつつ」行く必要が起こるのである。人の信仰においてなし得ることは、絶対的に罪を犯さないことではない。十字架のキリストを仰ぐことである。そして、この信仰のゆえに、人は「常に義とせられつつ」いくのである。人は常に罪を犯しつつ、常にゆるされつついくのである。故に「常に義とせられつつ」すなわちデイカイウーメノイの一語は、常に悩めるキリスト者に取りては、大なる慰めの語である。

パウロの「我は罪人の頭なり」「ああ悩める人なるかな」という叫びが、私には彼の真実の体験として聞こえる。同時に、されど、「我キリストによりて感謝す」という大いなる喜びが聞こえてくる。それはパウロが「常に義とせられつつ」あったからだ。そして、それが、私たちの大いなる慰めの語となった。

仰ぐことと、称えること

内村先生の文章にある「十字架のキリストを仰ぐ」という言葉に注目したい。

小西先生は、「十字架を仰ぐ」でも「御名を称える」でもよいと言われた。自分の信仰は常に揺れ動くし、妄念に汚がされて、さえぎられる。だからそんなものは当てにならないと言われた。先生は、かつて、我々は薄い信仰、弱い信仰でよいのだ、とも言われた。その故は、我々は自分の信仰によって救われるのではなく、「主の十字架」の贖いによって救われるのであるから。

主の御名を称える方が易しい

「律法の行いによらず信仰によって救われる」ということは、あくまで正しい。我々は、そのことを強調して「信仰のみによる」ということがある。しかし、このことはしばしば自分の信仰を強調し、それによつて安心を得ようとするようになる。自分の信仰の弱さを人前で嘆き謙遜する人がいるが、これはそのことの裏返しである。このことは、神の恵みの賜物を遠ざけることになるのではないか。

小西先生が「薄い信仰でよい」と言われた真意はここにあると私は思う。先生は「主を仰ぎ見ない者は、内村先生の弟子ではない」とまで言われた。両先生の言われたことの本質は、全く同じなのである。しかし、小西先生は「主の御名を称える」方を取られた。これは、先生が学ばれた仏教浄土門の影響も考えられるが、先生は「その方が易しいからだ」と言われた。「心乱れて、主の御顔を仰ぐことができなくなったときでも、主の御名を称えることはできるからだ」と言われた。

信と行は不即不離、表と裏の関係

小西先生は、「主の御名を称えることは『行』である」と言われた。だから、「私たちは行によって救われる」とも言いうる。また、先生は、「信仰の問題を解決するのは行であり、行の問題を解決するのは信仰である」と言われた。この言葉を私は、次のように理解している。

「自分の信仰を解決するのは、主より賜わった恵みの行であり、律法の行いを解決するのは、主より賜わった恵みの信仰であると」信仰と行は不即不離、表と裏の関係にあるのだ。

称名は薬を飲むストローのようなもの

先生は「称名は薬を飲むためのストローのようなものである」と言われた。また、「信仰を継続するための方法になる」とも言われた。称名にはいくつかの効用があると思われる。私の尊敬するある仏教徒が、次のように言われたことを思い出す。

「人はただ一回の念仏で救われるのである。親鸞は『念仏せんと
思い立つ心のおこるとき救われる』と言ったが、思い立った次の
瞬間に彼は念仏するから救われるのである。一回の念仏で救われ
るというのに、仏教徒が日々念仏を称えるのはなぜか、それは阿
弥陀仏に感謝するためなのである」と。

詩篇には、感謝の称名にちなむ詩が多い

我々の称名も同じ意味をもつと思うのである。12弟子の一人トマスは、イエスの復活を信じなかったが、復活のイエスを目の前にしたとき、ただ「わが主よ、わが神よ」と称えるだけであった。この言葉は、主をあがめ、感謝をささげる称名の代表といってよいであろう。詩篇には、感謝の称名にちなむ詩が多いが、1, 2例を挙げてみよう。

神よ、われらはあなたに感謝します。

われらは感謝します。

われらはあなたのみ名を呼び、

あなたのくすしきみわざを語ります。(詩篇・第75篇より)

主はわたしに耳を傾けられたので、

わたしは生きるかぎり主を呼びまつるであろう。

死の綱が私を取り巻き、陰府の^{よみ}苦しみがわたしをとらえた。

わたしは悩みと悲しみにあった。その時わたしは主のみ名を呼んだ。

「主よ、どうかわたしをお救いください」と。

主は恵み深く、正しくいさせられ、われらの神はあわれみに富まれる。

主は無学なものを守られる。わたしが低くされたとき、主はわたしを救われた。

……

私は救いの杯をあげて、主の御名を呼ぶ。

……

わたしは感謝のいけにえをなたにささげて、
主のみ名を呼びます。(詩篇・第 116 篇より)

称名は愛の行いの筆頭

先生は称名を行と言われた。そして、行を愛とされ、称名を愛の行いの筆頭にあげられたのである。愛の行い難いことを嘆く者として、この言葉は救いである。このように、「称名」は、救いのために不可欠な行であるとともに、主をあがめる行となり、主に捧げる感謝ともなり、愛の行いともなるのである。私たちが、日々主のみ名を称える理由はここにあるのだ。

律法学者の「すべての戒めの中で第 1 のものは何か」という問いに答えて、イエスは言われた、「心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せよ」と。また「自分を愛するように、あなたの隣人を愛せよ」と。(マルコ伝 12・30, 31)

この二つの戒めは表裏の関係にあり、切り離すことはできないが、それは「愛の行い」といういましめを実行することになるのである。

称名が愛の行いになる理由はここにある。すなわち、主の御名を称えるということは、心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なる神を愛することになるのである。そしてこの愛の行いは偉大な力を持つ。